

# 判官最貞

文學博士 藤村 作

私の申し上げます題は餘りに通俗的なやうに思ひます。實際私が御話申上げることが研究と申す程のものでない、日頃日本の歴史、日本の文學を見て居ります所から、私の頭の中に漠然浮んで居る所のものであります。今日は總べてのことが民衆的になつて居りますから、吾々が色々の方面の仕事をする上に考へなければならぬ一つの事柄ではないかと思つて居る事に就いて申すのであります。抑々判官最貞といふ言葉は何時出來た言葉とはつきりは申されませんが、徳川時代の典籍に見る言葉があります。判官最貞の世の中といふやうな言葉が往々此時代の文學などに見えて居ります。けれども判官最貞といふ我國民の感情の向き方はそれはもう遠く中古時代鎌倉室町時代にもあつたことと私は考へます。或はそれよりまた早くあつたものかも知れません。さうして其判官最貞の心は今日まで矢張り依然として残つて居ると思ひます。

判官最貞の判官は申す迄もなく九郎判官源義經であります。此義經は子供の時分には牛若丸と申し鞍馬寺に上げられて居りまして、鞍馬寺を出て平家の世盛りに源氏の復興を企て、奥州に下り、遂に御承

知の通り木曾を亡ぼし、平家を亡ぼした源氏の爲には殊勳第一人として世に能く知られて居る英雄であります。其の後はどうなりましたかと申しますと、兄頼朝の爲に忌まれて遂に鎌倉にも這入れず京都にも居り兼ねて吉野に落ち、更に北國路を通つて奥州に落ちまして、終に奥州で最期を遂げて居る人であります。前半生は頗る花々しい生活であつて武將として源平戦争第一の花形でありますけれども其後半生は頗る落寞たるもので不遇の間に死んで了つたのであります。此義經が人物としてどれだけ偉いものでありますか、其事を茲に論じやうとは思ひませんが、義經といふ人物が古來我國民の頭に深く沁込んで居りまして、誰でも子供の時分からお伽噺で、文學で、演劇で親しんでをります。例へば五條の橋の上で辨慶をやり込めましたやうな事は知らぬものはありません。絶えず何れの時代にも我國民の頭を刺激して居つたと思はれます。此義經を我國民が古來非常に尊敬し愛慕する、碎けていへば最負にするといふものが、此の判官最負といふ言葉の意味であります。人物の價値は別として最も人氣ある史的人物の一人として義經を國民一般の頭に沁込ませた最も古いものは平家物語、源平盛衰記である筈であります。此源平盛衰記、平家物語は御承知の通り義經の一生中最も活動した時代、武人的英雄としての花々しい時代を書いてあります。ところが其後室町時代に出た判官物語といふ有名な本が出ました。義經記として廣く知られて居る本であります。それから又同時代の謠曲には十幾番かの義經傳説に關したものがあ

す。それから又同時代の幸若舞の方にも數番あります。是等に依つて我國民の頭に義經といふ人物は一會鮮かに一層廣く深く膨込まれて來て居ります。徳川時代に至りましてはもう淨瑠璃といはず、芝居といはず、繪といはず各方面に義經は大切な花形役者になつて居るのであります。此義經は歴史上の義經其儘では無論ないのであります。幾度か文學の中を通過する間に傳説の義經はずつと歴史の義經とは變つて居ります、ずつと偉くなつて居ります、理想化されて居るのでありますから、もう徳川時代などに於きましては日本の武人の理想を具体化したものとなつて居ります。判官最負といふ我國民の感情は斯ういふ歴史や文學とか繪畫とかいふやうのもの原因となり結果となつて居ります。即ち判官最負の心が色々の義經關係の文藝を生み出して、同時に義經關係の色々の文藝が又判官最負の心を一層廣く深くして居るものと考へるのであります。そこで私の申し上げようと思ひますことは此判官最負といふものは一体どういふものであるか、其處に現れて居る我國民の心理といふものが、どういふやうなものであるかといふことであります。

第一には判官最負といふ中には英雄を崇拜する、偉人を尊敬するといふ心があると思ひます。それはもう平家物語を始めとして有ゆる文藝が皆義經を立派な偉い人として讚美したものであることでわかります。時代が降るに隨つて段々歴史上の義經に色々の屬性を加へて來まして、後に至るほど、義經は段段完全に近い人間に進んで來て居るのであります。古來の我國の歴史を辿つて見ますれば、英雄を崇拜

し偉人を尊敬するといふ考は餘程古くからあるのであります。それは英雄の靈を祭つた神社などが澤山ありますことに徴しても頗る明瞭なことで存じます。此判官最負といふ心の中に英雄偉人を崇敬愛慕するといふ心のあることは餘りに明瞭なことで精しく申す必要はないと思ひます。義経最負は併しこの偉人の崇敬愛慕ばかりではありません。他の一面として不遇者劣敗者に對する同情が結付いて居るものと思ひます。若し此一面がないならば義経最負は唯英雄偉人の崇敬愛慕に止まる譯であります。義経の後半生の不遇な悲惨な落莫たる生活があつて始めて普通の英雄偉人の崇敬でない判官最負といふ特殊なものが現れて居ると思ひます。若し義経が一生を通じて武人的英雄としての成功者でありましたならば、後世から他の歴史上の澤山の偉人豪傑を凌駕して、あれ程深く最負にせられる人氣物とはならなかつたご考へるのであります。國民の深い渴仰同情を一人で脊負ふやうになつて居りますのは後半生の不遇があり悲惨な最期があつた爲であると思ふのであります。平家物語源平盛衰記は判官最負といふ點から見ますれば、判官最負の一面なる英雄偉人を崇敬するといふ、其方面だけが見えて居るのであります。併し是が詰り判官最負の本を開いたに相違ないと思ひます。義経記になりますとすつかり違つて居ります。平家物語、源平盛衰記に現れて居ります活動時代の義経は洵に戦争の天才者である、非常な勇者である、武人としての成功者として洵に花々しい活動をして居ります。けれども義経記を見ますと此の中期は全く省いてあります。義経の生涯を通じて生立から亡くなりますまでを書いてある筈であり

ますけれども、中期の武將として源平時代に活動した時期は全然省いて書いてないのであります。さうして少年時代の義經、青年時代の義經即ち英雄の卯子なる牛若丸時代、遮那王時代の義經を精しく書いたのがその前半であります。是は無論歴史上果して確實であるかどうかは保證の限りでないのであります。御承知のことと存じますが、一二の例を申しますと、廣く世に知られて居ります京都の堀川の途上の話で、例の荒武者の武藏坊辨慶が千本の太刀を揃へて持ちたいといふ考を起しまして、夜々京都の街中を歩いて人の太刀を奪うて居つた。九百九十九本まで奪取して愈々千本とい時に義經に打當つたのであります。さうして義經の爲に散々に翻弄された上に其太刀を奪はれ踏曲げられて居ります。又京都の清水寺に義經が參籠して居ります時、前夜の失敗に遺恨を抱いて居ります辨慶が跡を慕うてやつて來てさうして挑み掛るのであります。そこで義經も已むを得ず起つて戰ふことになりました、其處では到頭辨慶を屈服させて家來にしてしまひました。辨慶も牛若の器量に感服して遂に家來になつたといふのであります。それから又義經五條の天神に參詣いたします時、鬼一法眼に頼まれてその婿でありまする湛海が義經を途に要して殺さうとした所が、此時反對に散々に湛海主従はやられて遂に殺されてしまひ、義經は勝誇つて歸ることになりました。又奥州に下ります時、鏡の宿で當時海道筋に有名であつた熊坂長範に多數の盜賊を率ゐて襲はれましたが小さい少年の牛若丸は目にも止まらぬやうな早業をして、恰も蝶か鳥のやうな早業をして當時聞けた所の賊の仲間を斬散らして遂に一行をして盜賊の

の難を免れしめたといふ話もあります。斯ういふ少年英雄の見事の働きは義経が鞍馬山に居りました時分に貴船の明神に祈り、又六頼の卷の兵書を得て兵法の秘術を會得したといふ所のものを實地に施した所のものであります。無論武人的英雄の少年時代を茲に現はしたものであります。それは平家物語などに見えないもので、英雄の崇敬愛慕の心を少年青年の時代に移して書いたものと思はれるのであります。

ところが又其處に特殊の意義があると思ひますのは少年英雄の義経の相手になりました所の者を見ますと、皆堂々たる大丈夫、當時の豪傑と稱すべき者であります。それから又義経は唯一偏の武人の子供としては現れないで、餘程貴族的で、先づ顔容から申しますと花も耻ぢらふやうな美少年であります。それから衣装其他總べての装が全く當時の公卿衆の公達のやうな貴族的のものであります。さういふものは元の義経には無かつた所で皆傳説で美化したものに相違ないと考へます。極めて可憐な美しい幼い姿をした牛若丸が堂々たる豪傑丈夫に對抗するのであります。そこで普通の斯ういふ小さい子供と大きな而も偉い豪傑の辨慶などのやうな者と戦ふに於ては、之を第三者から見ますと、どうしても量貞の心は少年牛若丸の方に傾くことは當然のことだと思ひます。如何にも弱い者と目に映つて居ります所の牛若丸を勝たせたい、彼様な偉い大きなものに對抗しては可愛さうだといふ心が、第三者に起つて來ることと思ひます。然るに實際の立會になりますと、其弱々しい女のやうな子供が恐しい鬼のやうな相手を盡く仕止めてしまふといふことになるのでありますから、初めの同情は茲に急に變つて此子供

に對する尊敬となり、非常に偉い者だと感心する所に一層少年英雄に對する憧憬の心、又虫貞の心を深くするのであります。義經記の上半部は斯ういふやうな心持を書いて居るものと考へます。それで何處までも美少年義經は幼氣な弱々しい貴族的な子、美少年の女のやうな子供として現れてゐて、さうして意外にも底に強い所のあつたといふやうに書いてあります。それで見ますと義經記の前半部は平家物語、源平盛衰記に現れて居らぬ、少年時代の義經を想像して此英雄偉人に對する崇敬の心をば斯ういふ傳説の形に造つて現はしたものであらうと考へる。矢張り簡単に申せば英雄崇拜の判官虫貞の一面であらうと考へる。然るに義經記の後半部はどうなつて居るかと申しますると、源平盛衰記や平家物語に書きました部分を悉く素通りにして、それを書かないで突如不遇の人としての義經を書いてあるのであります。即ち梶原景時の讒言に會つて兄の頼朝には疑はれ忌まれ、京都を落ちて先づ吉野山に遣入りましたところが折角頼つて參りました吉野の大衆は却て義經に背くことになりましたから、吉野を逃れて再び京都に這入つて參りまして、堀川の屋敷に居りましたけれども、鎌倉からして討手の兵を向けられ土佐坊の堀川の夜討といふやうなことが起りました、到頭京都にも居れなくなつて都を立つて北國路に差掛りました。そうして彼を捕へる爲に新に頼朝が設けました諸所の新しい關所々々に行掛りまして彼方此方で色々の難儀に會ひました。漸く難儀を逃れまして奥州に降つて秀衡を使つて此處で落付くことになりました。けれども不幸にも秀衡が死にまして其の子の泰衡が父の遺言に反き彼に背くことになりました。

した。それが爲に彼は到頭奥州に於て辨慶等の股肱と残らず討死を遂げてしまつたといふことが義經の後半であります。此後半部に於ける不遇の義經は其前半部や平家物語などに現れて居ります如何にも花々しい英雄的の活動、英雄的の事業、さういふものが我々の記憶に鮮かでありますだけ洵に見る影もなき蕭條落寞たるものであります。此蕭條落寞たる義經の後半生に對して、讀者たる第三者、申し換へれば我國民一般は皆同情の涙を以つて之に對する譯であります。此同情の涙は義經が源平戦争に於ける武勳第一の人でありましたとけ、それだけ濃いものであると思ひます。單に不遇なるが爲めといふばかりでなく、狹量なる兄頼朝に疑はれ奸佞なる梶原に讒せられたといふことが讀者一般の頭にありまするだけ其同情は深くなつて居ると思ひます。でありますから判官最負の心の一面には不遇なる者、劣敗者、悲哀なる者に寄する同情のあることは疑ありません。以上二面の外に今一つ考へねばならぬことがあります。義經の後半生を悲哀なもの、弱いもの、不遇なものにした者、即ち義經を壓迫した強い者義經を負かした大きい者勝誇つた者に對する國民の反感であります。其反感が逆に義經に對する同情を一層深めて居るのであります。具体的に申しますると兄頼朝、梶原景時といふやうな強力な敵役があつて義經に手甚い壓迫を加へ手痛い追究を加へて遂に義經を死地に陥れたといふことから判官最負の感情が高められてゐると考へます。でありますから判官最負といふ反面には意地の悪い頼朝、又虫蜒の梶原景時——梶原景時は昔から虫蜒を以て稱せられて居ります——さういふ面憎い者を憎む感情があつて、此



場合餘程有力に助けてゐると考へます。若し頼朝が無く梶原が無かつたならば義経最貞はあれ程國民の間に廣く行渡りもせず、又深くもならなかつたものと考へます。でありますから我國民の心の上に残しました所の印象から申しますならば、頼朝や梶原は現實では義経を宥宥して死地に陥れた勝誇つたものでありますけれども、實は自分等の悪名不評判不人氣を以て義経の評判、最貞、名譽を高めてやつたものと考へます。斯ういふ行き方が常に徳川時代の淨瑠璃歌舞伎の作者などに用ひられて忠臣義士孝子といふやうな見物の同情を集めようといふ人物即ち主人公に對しては、必ず敵役といふ者が附くことになつて居ります。其敵役は芝居などでは一見して何とかしてやりたいやうな憎々しい毒々しい人物に造つてあります。

是は義経記に就いて申したのでありますが、尙ほ同じ時代の謠曲に就いて見ましても同じことであります。謠曲の義経傳説に關するものを見ますと、義経の最も活動した武人的英雄として眞面目を具へて居りまする時代を書いたものは先づ屋島位のものであります。外のもは鞍馬天狗、熊坂、橋辨慶、烏帽子折といふが如き少年英雄としての牛若丸、遮那王時代のもを書いたもの、又は船辨慶、忠信、安宅といふやうな落魄時代の義経を書いたものであります。其他義経傳説中の靜に關する吉野靜、鶴ヶ岡であるとか、それから泰衡、泉三郎に關する錦戸のやうなものも落魄時代に關したものであります。若し單に義経を尊敬するといふ心からばかり斯ういふ文學が作られたものであるならば、武將として、英

雄として最も活動の目ざましい平家物語の義經から題材を選んで來さうなことでありますのに、それが全然逆に却てあの女のやうな美少年としての義經追究されて、身を容れるの所ない程落魄して苦しんで居る義經を強ひて選んで題材にせずとも思ひます。判官最負が決して英雄崇拜ばかりでなく、却て他の一面が寧ろ著しく働いて居るものであると斯う私は考へるのであります。それから幸若舞の草紙に就いて申しましても矢張り同じことが申されます。次に徳川時代の文學には義經關係のものが多いためでありまして矢張り少年英雄として牛若丸を非常に譽めた、へた所のものであります。或は不遇の義經に深い同情を注いだものであります。唯室町時代の文藝に現れた義經と徳川時代に現れた義經との違ひを申しますれば、流石に時代が違ひまするだけ徳川時代のものには近世武士道的の屬性が加へられて來た、前の傳説に見わた性格だけではなくして、近世武人的な面目が大分加はつて居るといふこと位であらうと私は思ひます。徳川時代に於て義經が文藝上で最も人氣のある英雄的人物であつたといふことは、曩に申しましたやうに既に判官最負といふ言葉が特殊に出來て居りまするし、判官最負の世の中といふ熟した言葉が屢々用ゐられるやうになつて居りまするのがそれを證して居るのであります。此時代の人々には判官最負といふことが、はつきり意識されて居つたものと見るべきであります。獨り武士階級ばかりでなく平民社會にも廣く最負にされるやうになつて居ります。町人文學の中にも義經といふ人物は最も人氣ある人物であつたのであります。

そこで斯の判官最負の感情は單に義經のことには止まらないのでありまして、私は我歴史中の人物で最も國民の頭に印象の深い又最も人氣の盛んな人物を取つて考へて見ますと、丁度義經と同じやうな條件を有つて居ることを見出します。菅公の如きは最も適例であらうと思ひます。菅原道真が昔から最も人氣あり人望のあつた人物であることは申すまでもありません。其道真が政治家としてどれ程偉かつたでありませうか、それは今日段々色々の學者の研究もありまして、もう論定されて居ること、思ひます其政治家として偉かつたといふよりは寧ろ詩人として偉かつたといふことが今日の定評であらうかと存じます。殊に道真の忠誠な精神、其詩歌に現れて居ります純眞な感情といふやうなものが古くから大變人望を得させて居る點と考へます。後に國民の菅公最負をする其心の一面には矢張り偉い人としての崇敬があるのであります。それと共に大宰權師に貶謫されて、九州で大變不遇の中に死んだといふことが丁度義經の後半生の極めて悲哀であつたといふこと、大變似て居ります。其末路の悲惨なこと、それに對する國民一般の哀憐同情の心が矢張り菅公最負の一面であると私は思ひます。更に第三の點に於ても矢張り同じと思ひます。即ち菅公に對しては藤原時平といふ歴とした國民一般の憎惡反感を有つて居ります所の敵役が居るのであります。

それから又他の例を考へて見ますと、例へば豊臣秀吉の如き矢張り我一般の國民の頭の中では人氣のある英雄偉人であります。此秀吉が蓋世の英雄であるといふことは申すまでもない、秀吉に對する人氣の

一面には英雄として之を崇敬するといふ所は無論あるのでありますが、此秀吉が朝鮮征伐を思立つて其事が思ふやうにならず是までの花々しかった生涯が爰に至つて甚だ振はなくなつて終に陣中に歿したことは道真や義経程の末路の悲惨といふことはありませぬけれども、あの大きな氣膽を具へた秀吉だけに蕭條落寞たる悲哀の感は確かに見えて居ります。のみならず秀吉が亡くなりまして間もなく豊臣氏の天下は亡びてしまつた。其豊臣氏の悲惨な末路が直ぐに英雄秀吉に結び付けられて考へられますので、秀吉の後半生の落寞悲哀は一層深くなるやうに思ふのであります。秀吉を最負にする我國民一般の心には矢張り義経や道真と同じやうに不遇なるものに對する同情の心のあることは疑ひないと思ふのであります。更に又豊臣氏に對して辛辣なる術策を用ゐて終に之を滅亡の深淵に赴かした所の人所謂老奸雄といはれて居ります所の徳川家康に對する國民一般の反感が一層秀吉に對する同情を深めて居るといふことも前の二人と同じことであると私は考へます。

更に又最も人氣ある一人として西卿隆盛を考へても同じことが思はれます。西卿隆盛は維新の元勳中第一の人氣者であると申して差支なからうと思ひます。隆盛の半生は矢張り花々しい成功といはなければなりません。のみならず維新當時の豪傑の中でも其心事の公明正大なこと、東洋流の大きな包容の量をもつた人であるといふこと、極めて無我的の英雄であつたといふ點は十分我國民の崇敬を受くべき資格をもつた偉人であると考へます。然るに此人も矢張り征韓論以來蹉跎して故山に隱退しまして、到

頭心ならずも賊名を負うて城山の露と消ゆるやうになつたのであります。是は吾々の記憶に鮮かなことで、其末路は兎も角悲哀なものであつたのであります。此の彼れの後半生の不遇なものであつたといふことも矢張り前の三人の人々と同じことであります。でありますから我國民一般は十年役の罪科を問ふことは餘りせずして却て深く隆盛に同情して居るといふことが一般であるやうであります。又征韓論の反對者として隆盛の敵役として我國民の頭には大久保利通といふ人があるやうに考へます。大久保利通の政治家的偉人であつたといふこと、殊に其の維新以來の功績といふやうなことは餘りに我國民一般は軽く見て居ると思はるゝ程大久保利通は不人氣であります。多少の反感さへ無いとは限らぬやうに私は考へます。さういふやうに考へますから、西郷實貞の國民一般の感情の中にも丁度前の人々に擧げたと同じやうな三つの要件が具はつて居ると考へます。

例としては餘り時代が近過ぎるか知れませぬけれども、哈爾賓で亡くなりました伊藤公の如き矢張り近頃の人気者の一人として考へることが出来ます。公も明治時代に傑出したる偉人として國民一般の崇敬を受けた人であります。それと共に哈爾賓の最期は一面から申せば花々しい最期ともいへませうけれども、確かに悲哀なる最期でありました。あれだけの功績とあれだけの名譽を有つた人があゝいふ横死を遂げられたといふことに對して國民一般の同情が多く集つたと考へます。さうして尙ほ能く考へて見ますと公の公生活の上では確かに敵役といふべき地位に立たれる人が無かつたとも申難いと思ひま

す。矢張り私は例の三要件が備はつて伊藤公に對する所謂最負人氣といふものが集つて居ることを考へます。其他私は色々の人物に就いて考へまして、矢張り同じことがあると見て居ります。

例へば楠正成、正行の親子の如きにしても大石良雄父子の如きにしまして、大抵私の先刻來申しました三つの要素を有つて居る人々であります。それから能く徳川時代に現れました俠客町奴の如きも人氣者の一つと思ひますが、彼等が平民社會に偉いと見られて居つたことはいふまでもありません。殊に階級制度の壓迫を受けて劣者であり弱者であると見られて居つた平民階級の者であつて而も常に虐げられて居つた人間であるといふことに對する一般國民の同情、是が餘程深かつたのであります。のみならず斯ういふ者に對しては常に幕府當局であるとか或は旗本奴の如きものであるとかいふ如き敵役が常に考へられるのであります。さうして見ますると矢張り江戸の芝居や文藝などに盛んに人氣を博して居ります町奴の如きも大抵判官最負の方面から考へられる人間であると思ひます。

そこで翻つて一生涯を通じて満足であつた人、成功者といふ側を考へて見ますと、例へば中古時代の藤原氏の政權を有つて居りました時代には決して偉人俊傑が無いではありませんのであります。殊に關白道長のやうな人もありましたけれども、國民の人氣は不遇な一詩人菅原道眞の人氣最負には及ぶべくもないのであります。其時代に於てこそ思ふこと遂げざるなき非常な榮華に誇つた人でも此不遇な道眞に及ばなかつたのであります。武家時代に就いて見ますと先刻申しましたやうに源頼朝は義經の爲の敵役で最

も人氣のない人物であります。それから北條氏九代の基を開いた北條時政の如き嫌はれ者の一人であります。北條氏には泰時の如き時頼の如きなか／＼俊傑の士がありました。人氣といふ點からいふと失脚して落魄した義經に及ばざること遠しであります。足利尊氏の如きは國民の怨府とでもいふべき人物であります。徳川五十年代の祖たる家康も所謂老奸雄として國民の心に印象して居る一人であります。今日でも日光に行く人々は澤山ありませうけれども、家康に對する崇敬の心を以てその靈に拜禮して居るでありませうか、私は今日と雖も家康は實價以下に國民多數の間に評價されて居るやうに考へます。斯ういふやうな人々は國民精神道徳といふ上から見て非難さるべき弱點を有つて居るに致しましても、併し斯ういふ人々を他の國民最負の偉人豪傑に比べて見て、私は世の中の判斷、世の中の人氣、世の中の最負といふものが昔から公平であつたといふことは考へ得ぬのであります。寧ろ嫌はれ者となり忌まれ者となつて居るといふ點に却て同情すべき點の大いにあるやうにさへ考へます。判官最負といふ心理から考へますと、斯ういふ人々は敵役といふ割の悪い立場に居つた人々と考へます。判官最負といふ意味を斯う考へて來ますると同じ英雄偉人傑士天才といふやうな人々に致しましても判官最負の國民一般の心の向き方に適應して行動を取つて始終さういふやうに動いて居るは眞價以上に渴仰され尊敬されて居りまして、それに反して判官最負の敵役の方に廻つて居る人は實價以下に落されて悪人奸物と忌まれ唾棄されるやうになつて居るといふことが私の頭に始終浮ぶのであります。精しく歴史に就いて研究した

わけではありませんが、さういふことが何時となく私の頭に常に浮んで居たのであります。

さうしますると今日政治とか實業とか其他國家社會に對する色々の仕事に従事して居ります者、多數の民衆國民を相手にして人望とか人氣とか最負とかいふものの中に其事業の消長を支配されて居るもののは、私は此判官最負といふ國民の感情の向き方に就て能く考へることが最も賢いことであると思ひます。之を利用しまするといふと、能く前途を切開いて行くことが出来るものゝやうに考へます。

現代のことをそれに取つて申すことは私は好みませんが、茲に假に一つの大きな政黨があると假定いたします。其政黨が現今最も有力な階級に根據を有ちまして、其の最も有力なるを代表として他に比類なき勢力を今日の政治界に有つて居ると假定いたします。又其政府の代表者が今日政黨を有つて廟堂に立つて政府を組織して居ると假定いたします。而して又其政黨が今日議政壇上に於て絶對多數を有つて居るものと假定いたします。斯ういふ立場に居りますれば政府は殆ど思ふことを何でも成遂げ得る程の實力を有つて居ると斯う私は假定いたして置きます。さうしてそれに對すべき反對黨は全く微々たるもの、其勢力が氣の毒な程弱いものと斯う又假定して置きます。さういふ場合に強力なる政府が最も其勢力を發揮してさうして其態度が我國民一般の目に横暴である、傲慢であるといふやうに映り勝つたものであるといふやうに見られますと、之を判官最負といふ立場から見ますと、偉人英雄崇敬の條件は具へませうけれども、他の方面の劣敗者、弱者に對する同情といふ方面は全く缺けて居る譯で



あります。そこで民望、人氣、最負といふ點に於ては決して、満足なものではなくるのであります。若し斯ういふ強大な政黨強力な政府が反對黨などに對して強く威壓を加へ脅威を加へるといふやうな驕慢な態度が強ければ強い程自分は却て頼朝や家康のやうな敵役を引受けることになつて行くことが多いと思ふのであります。でありますから民衆の人氣信望といふ方から見ると其處から離れて來て、不人氣不人望といふものが其點から胚胎して、來ることが餘程著しくあるだらうと思ひます。斯ういふ立場に若しあるとすれば、大政黨の政權を掌握して居る勢力は、此所十年も樂に維持し得べしと豫想されるものが、或は三年位で人氣の凋落から没落に及ばないとも限らないと考へます。今日の政治界のこの如きは洵に複雑なもので、單に之を民望とか最負とか人氣とかいふことからばかり考へることは無論出來ぬことであります。併ながら又一方から考へますと、存外政黨の移動も民衆一般の人氣に支配される時代になつてゐると思ふのであります。それで斯ういふことにも矢張り判官最負といふことを慮に入れることが必要であると思ふのであります。さういふ場合に反對黨があつて、其反對黨が大政黨の威力に壓倒されて洵に徹々として振はない状態にあると斯う定めて置きます。若し其政黨が正々堂々と正面から強力なる反對黨に對して戰爭をすることとせずして何か偶然なる或機會を頼み例へば所謂熟柿の落ちるやうな機會ばかりを待つて居るといふ態度を採つて居ると假定いたしますと、それを判官最負の立場から見ますと、甚だそれは拙劣であります。何となれば判官最負の一面の劣者弱者に對する同情は

其處へ集ることもあるべきでありますけれども、併し判官最負の他の一面、英雄偉人崇敬の一面を缺くことになるのであります。でありますから斯ういふ立場斯ういふ態度の政黨には人氣最負が付きません。それで若し民望人氣を得ようとするならば、寧ろ思ひ切つて英雄的の行動に出づることが此際有利であると考へられるのであります。さうして反對黨が大政黨を敵役に押廻す工夫をすれば民衆の人氣最負は必ずこれを後楯にすることが出來ます。これが反對黨の取るべき最も有利なる態度ではないかと思ひます。是は單に判官最負といふ立場から考へて申す次第であります。

又極近頃に起つた或問題に假に少し觸れて見ます。或富豪の夫人が其富豪の夫を後足に砂を掛ける態度で自ら離縁を宣告して出たと斯ういふことがあつたと假定いたします。其女が假に社會から天才の詩人だと見られて居ると致します。さうして其夫たる人は非常な金力は擁して居るが全く無智なる人であると假定いたして置きます。斯ういふ夫婦に若し相互の間に離婚問題を起してそれが社會に暴露した場合には、一方が非常な富を持つた男性で一方が孱弱い婦人であるといふ所に人氣最負は婦人の方に集まるのが普通であります。其處に婦人の方に、多少是までの道徳を無視して居るといふ弱點があるとし、まして、社會の同情人氣が悉く婦人の方を去つて男の方に向ふことは考へられませぬ。然るに此場合に於て婦人の取つた態度が如何にも勝誇つた様で自分の方が強者である、強者である、勝利であるといふ態度を見せたならば、さうして富豪の方は却て唯黙して劣敗者の立場を守つて居るならば、（無論人の家庭内

のことなどは非常に複雑なもので外觀から之を軽々しく批評すべき限りではありませんから私は唯それだけのことを假定して申すのでありますが、さうして其場合に夫の女に對する虐待といふやうなことが事實として社會の目に映つて居らないならば、社會の人氣最良は必ずしも婦人の方には付きません。その上に其婦人が女王の如く平常振舞ひ其作つた歌には自分の夫を嘲笑愚弄したものとさへ見えてゐたといふ、條件をも加へて見れば判官最良の立場から見ますと此の婦人は敵役の方に回つたものである。勝誇つた強者優者と一般からは考へられるやうになつてゐると思ふのであります。その上に其門地とか才能とか美貌とかいふものが具はれば其は程斯ういふ態度を執つて居る婦人は最も惡まるべき敵役とならなければならぬと思ひます。でありますから判官最良の立場から見ますと、どうしても國民一般の同情が其方に向はないで反對の夫の方に向くと斯ういふ現象が起ると思ふのであります。私は單に判官最良といふ立場からのみ此事を眺めて考へるのであります。此の際此の婦人が若しおとなしく誤つたる結婚といふことに覺醒して離縁を求めた、夫はどうしてもそれを許さない、さういふ場合に更に自分には愛人があるといふやうなことを告白して重ねて離縁を求めたとします。さうすると無學な夫は此事に十分の理解を有ち得ないから愈々此婦人に虐待壓迫を加へることになつて社會にも其虐待の事實が認め得られるやうな時に、若し有らゆるものを捨て、夫の家を飛出したといふやうなことであつたならば、私は是を判官最良の立場から見ても、どうしても社會一般の同情は、婦人の方に向はなければならぬと思ひま

す。さうして若し其場合に婦人が社會の同情と最負といふものを味方として戦つたならば此問題を自分の方に最も有利に解決し得たと考へます。是は此事に對して最も怜悯な處置ではなかつたでせうか。

斯ういふことは唯假定の上に判官最負を實際の事に當て、考へて見ただけのことでありませう。唯今世に流布して居る事件を批評する積りで申したのではないのであります。斯ういふやうに私は判官最負の感情が昔から今日に至るまで我國民の間に存在してそれがどうしても民衆を相手にし多數を相手にするといふ場合に、或は味方となつて助け或は敵となつて妨げてゐると思ふのであります。今日の私の話は何も研究の結果を發表するといふ態度ではないので、唯日頃心に浮かんでゐる所のものを申して御參考に供したまでとあります。而してその事は今日現に我々の任んで居る此時代の事にも幾らも當嵌まることがあると思ひますので、此の事を一考して頂きたいと思つて此處に立つた次第であります。

常陸河原に海岸岩崎樓上より太平洋を眺めて

打よする浪の心は知られざし

尊農居士

國を強むる農村を思ふ